

平成 9 年 6 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

デパートに故郷の花ありき

新宿の某デパートの屋上には山野草の売り場があります。かなり広い場所にビニルポットや植木鉢に植えられた山野草がところ狭しと並べられています。スマレやミズヒキ、ヒガンバナなど青梅市の野山を歩くとどこにでもみられるなじみ深いものからクマガイソウ、ヤマシャクハク、各種のエビネなど希少価値のあるものまでが売り棚の上にずらりと並んでいます。傍らの屋内売り場には一鉢が数千円、数万円もするシュンランなどの東洋らんが鍵のかかったガラス戸棚の中に丁重に取り扱われています。

山野草ブームはひとところに比べて下火にはなったようですが愛好者に支えられて今なお根強い人気を持ち続けています。この売り場にも日中は中高年の女性方が、夕方には勤め帰りの壮年の男性諸氏が立ち寄って買い求めていく姿が見られます。いったい山野草の何が、このように人々の心を惹きつけるのでしょうか？

その1つめは、山野草の美しさです。飾り気の無い、清楚ともいえる姿、色合いには外来種や栽培種の花には無い落ち着いた美しさがあります。

その2つめは、1鉢の価格があまり高くないことです。500円から1000円前後で求められます。買おうとすればあまり考えることなく手を出せる金額です。

その3つめは、都市部の人々の居住区間（家の敷地）が狭くなっているため大きな盆栽の鉢ではいくつも置けません。山野草の小鉢なら沢山置くことができます。

その4つめは、山野草を愛でる人たちの年代構成です。40歳半ば以上の人たちの多くが地方出身です。子供のころ野山駆け回って遊んでいたころに見た花を大都会の真ん中で見たとき、幼なじみに再開したような思いにかられます。

その5つめは、あの売り場を訪れる世代の男性の多くが職場では重責を負わされている反面、家庭にあっては、その存在が軽くなってくる世代です。そんな人たちに花は優しく接してくれます。山野草には、ほっとする優しさ、安らぎがあります。

山野草ブームは、これからも続いていくでしょう。しかし、それは一方においては自然の破壊になり、希少種の絶滅にもつながります。すでにレンゲショウマ、タマガワホトトギス、エビネ、それにシュンラン、ヤマユリでさえも青梅市内の山から姿を消そうとしています。山野

草は山採りをせずに種を蒔いたり、株分けや挿し芽などで増やしたものを譲り受けるなどして楽しみたいものです

(文責 中西 勲)

・ 「わがまち青梅～歴史・文化財・自然～講座」のお知らせ

文化財保護指導員の先生方を講師に迎え、歴史講座を大門市民センター、文化財講座を青梅市民センター、自然講座を沢井市民センターで行います。各講座とも7月から11月までの期間で、見学会を含めた10回を予定しており参加者を募集しています。(各定員50人)。

なお、詳細および申し込みは各市民センターにお問い合わせ下さい。

大門市民センター (☎31-2251) 青梅市民センター (☎22-1131)

沢井市民センター (☎78-8304)